

国際ワークショップ『ローカル・ニーズの豊かな世界： 「草の根」からジェンダー課題を考える』の成果と課題

服部朋子 藤掛洋子¹ 江藤双恵² 日下部京子³
水野桂子⁴ 平野恵子⁵ 池田恵子⁶

Lessons and achievements from the International Workshop; "Gender and Development' and the Local Needs: Networking for Gender Equity with Locally-Diverse Gender Needs"

The international workshop "Gender and Development' and the Local Needs: Networking for Gender Equity with Locally-Diverse Gender Needs", held in March 2007, was organized by 'Gender and Development' sub-group of the International Society for Gender Studies. Local leaders, NGO workers, activists and academics who work with grassroots women in 6 Asia countries and Japan participated in this workshop. They shared their experience of working on Gender and Development (GAD) agendas in each locality, in order to find out 'how to reflect diverse local gender needs on broader development policies and projects'.

In this article, seven of the Japanese participants analyze the lessons and achievements of the workshop. Also, the key concepts like 'local needs' are re-examined, and the process of the workshop itself is also analyzed. Throughout planning and organizing the workshop, we strongly realized that all needs expressed/unexpressed are influenced by the power relations in which local people live their life. We, the practitioners and researchers of GAD are also a part of this power relationship.

In order that GAD policy and practice incorporate various needs in the multi-layered and ever chaining 'local' space, three issues needs to be elaborated further. 1) Power relations operating within and around the locality, which influence representation of needs; 2) The person in-between the 'local' and 'national' and/or 'global', who can hear the grassroots people, and assemble their voices; 3) The political process by which the 'global' and 'national' policies are introduced into the local setting.

Key word: Gender and Development, grass roots, gender equality and equity, local-needs, diversity

NTC インターナショナル株式会社

1 東京家政学院大学家政学部家政学科

2 獨協大学非常勤講師

3 アジア工科大学院

4 東京女子大学大学院人間科学研究科博士後期課程

5 お茶の水女子大学大学院博士後期課程

6 静岡大学

1. はじめに

服部 朋子

本報告は、国際ジェンダー学会「開発とジェンダー」分科会が企画・運営して開催した国際ワークショップ「ローカル・ニーズの豊かな世界『草の根』からジェンダー課題を考える」の成果と課題をとりまとめたものである。

この国際ワークショップ開催によって得られた課題を分析・考察にするにあたり、当該取り組みの概要を服部がはじめに整理し、そのあとに、各メンバーが個別に課題を探る形式をとることとする。

第一の各論で藤掛は、「ジェンダーと開発」研究の課題について紹介し、草の根の人々の声を政策に反映できる新たな枠組みの構築の必要性をまず投げかけている。第二に江藤は、「ローカル」な価値観と西洋的な概念としての「開発」や「ジェンダー」の間には往々にして「ズレ」があり、ドナーの「開発とジェンダー」課題設定のあり方に問題があるのではないかと問題提起する。そして第三に日下部は、「ニーズ」という用語が使用される文脈とそこでの意味を整理し、さらに「ローカル」の概念との関係性を吟味することにより、「作られるローカル・ニーズとジェンダー」を検討している。第四に水野は、国際ワークショップに招聘した自分のカウンターパートとの協働報告において、双方の立場性に基づく共通点と相違点を整理し、その過程で生じた葛藤、ディレンマなどを考察している。続いて平野も協働報告作業を通じて、調査者／研究者のディレンマを紹介し、「調査者と被調査者」の権力関係の再考を試みている。最後に池田は、ワークショップの成果と課題、および今後の展望をまとめる中で、ローカルな人間関係・権力関係の中で生きる人々からニーズが表明されることの重要性を指摘している。

我々分科会メンバーは、研究や開発関係実務者として「ローカル」の現場に携わってきたが、「ローカル」な価値観とドナー側の「開発」との間にズレがあるという共通の感覚をしばしば持っている。この「ズレ」に関する議論は今に始まったことではなく、さまざまな立場や切り口からなされてきているが、今日我々グループが取り上げた意義について次に整理したい。

「ローカル・ニーズ」は、我々研究会のテーマの1つとして取り上げられ、議論してきているものの、我々研究会としてまだ不十分との認識がある。先行研究をみると「そもそも政策決定には、実務者は不在で決まってきた」といった議論があり、研究者、実務者、運動家、地域リーダーなどから成り立つ我々グループとしては、議論の再訪に臨みたい。

国際協力の世界における「政策と現場ニーズ」の「ズレ」に関する議論は後をたたく、そのズレの修正を試みるさまざまな手法やアプローチが検討、実施されてきている。例えば、一時期、一世を風靡した「参加型開発」は1つの例であるが、参加型の概念の危うさや形骸化が叫ばれ、開発の主体の理論と実際の乖離の存在などブレイクスルーとなりえていない現状がある。そして、現在「MDGS：開発ミレニアム目標」が脚光を浴びているが、この用語も一人歩き感がゆがめず、このMDGSに対して「地域（ローカル）」を今、取り上げたいと考える。グローバリゼーションの進んだ今日においても、いやそれであるからこそ、この「ズレ」を今日的に捉え直す試みをしてよいのではないだろうか。何が政策と現場のニーズの不一致を招き、何が一致することなのかを示すことにより今後の本分野での議論の土台となっていくことを期待している。

1-1. 国際ワークショップ概要

本国際ワークショップ「ローカル・ニーズの豊かな世界－『草の根』からジェンダー課題を考える－」（国際ジェンダー学会主催）は、2007年3月24日（土）・25日（日）の2日間にわたり、東京家政学院大学三番町校舎にて開催された。実施主体は、「開発とジェンダー」分科会メンバーが中心であり、2005年度トヨタ財団「アジア隣人ネットワーク」プログラム、国際交流基金およびIGSW基金からの助成を得ている。

我々「開発とジェンダー」分科会は、長期にわたり月1回の定例会を実施してきており、各個人の研究内容発表による討議、ジェンダー研究に資すると判断した資料の共同翻訳およびそれらの成果を国際ジェンダー学会で発表報告するなどの活

動を継続してきている。

メンバーは研究者および国際協力実務者からなっており、特に本ワークショップ開催にあたっては、各メンバーがこれまで培ってきた個人的ネットワークを活用し、地域女性リーダー、運動家および NGO 実務者なども参画している。

共通課題として我々は、アジアを中心に世界各地域の固有性や社会文化的背景に即したジェンダー平等推進をあげ、各国・各地域に固有なジェンダー課題および共通のジェンダー課題についての整理を試みてきている。

本ワークショップでは、そこから生じた問題意識の1つとして「『ローカル』なジェンダー課題をいかに開発の現場における各プログラムに反映させるか」を取り上げ、メンバー間そして一般参加者間（研究者や国際協力実務者などが中心）とも、お互いが持つ情報や経験を共有し、討論を行った。これらに関する詳細内容は、ウェブサイト (<http://homepage2.nifty.com/devgen/>) に反映、発信をしているので、参照されたい。

1-2. 国際ワークショップ内容

基調講演を皮切りに問題提起がなされ、パラグアイの事例報告の後、日本およびアジア各国の研究調査報告（16の発表）が進められた。問題提起は、「ポスト『ジェンダーと開発（GAD）』に向けて」、「なぜ『ローカル・ニーズ』・『草の根』が重要か?」、そして「作られる『ローカル・ニーズ』とジェンダー」についてである。研究調査報告は、①ジェンダー・メインストリーミング再考、②地域における女性のリーダーシップ、③ジェンダーの視点から見た開発政策、の3つのセッションで構成された。これら各セッションで抽出された問題点を踏まえ、4つのグループに分かれてディスカッションを行った後、全員（我々メンバーと31名の一般参加者の総計51名）で共有・考察し、総括を行った。

その後、参加者からの評価の検討を含めたメンバー間による事後評価会を開催し、生じた疑問点や今後取り組むべき重要な課題などをとりまとめた。

表1に、我々メンバーが取り組んできた調査研究を整理する。

表1 我々が取組んできた調査研究

テ ー マ	地 域
● 地方行政におけるジェンダー主流化	ラオス
○ 道路建設における作られた「ニーズ」	ラオス
● 女性の洪水対策への参加	バングラデシュ
○ コミュニティ防災	バングラデシュ
● スラム女性組織による収入向上	フィリピン
○ 生活改良普及員の機能	日本
○ 家庭科教科書内容分析	日本
○ 出産の伝統的養生法と近代医療	カンボジア
○ 母乳育児政策	タイ
○ 生活時間指標を用いたジェンダー予算分析	オーストラリア
● ジェンダー主流化プロジェクト	カンボジア
○ 農村女性のエンパワーメント評価	パラグアイ・ホンジュラス
●○地域女性の活動とエンパワーメント	日本
●○農村女性起業	日本
●○女性ボランティアによる家族福祉運動	インドネシア
● 草の根フェミニズム	タイ

注：○は日本人メンバー ●は海外メンバーが提示した事例

2. ポスト「ジェンダーと開発（Gender and Development: GAD）」に向けて

藤掛 洋子

今日、GAD（Gender and Development Studies）は、国際協力や NGO の開発実践者（practitioner）、運動家（activist）、草の根の運動家、研究者にとって重要なテーマとなった。

GAD の議論が深まった背景には、「国連女性の10年（以下、「10年」）」とその前後に開催された多くの会議がある。10年は、歴史的、社会的、地理的文脈が異なるアジアやアフリカ、ラテンアメリカ諸国の女性たちにも大きな影響を与えてきた。それは各国におけるナショナル・ナシーナリーの設置状況などからもうかがえる。国家や地域を越えた民族問題の解決に向けた動きもある。その一つが先住民族女性の問題である。これらもまた、10年の成果であろう。

一方、フェミニストの立場から GAD 論を推進してきた研究者に対し Mohanty [1991] は、「西欧」を理論と実践における第一の参照対象とし他者を非西欧としてコード化することにより（暗に）自分自身を西洋とコード化する書き方」が持つ効果に注意を喚起してきた。そして、氏は、一部のフェミニスト著作が、第三世界における物質

的・歴史的多様性を植民地化し、西欧ヒューマニスト言説の権威の中で議論を展開してきた点を批判している。結果、女性は「抑圧の共有」を基礎に単一のグループとして特性づけられてきた。女は男の暴力の犠牲者、植民地化の犠牲者、経済的發展過程の犠牲者、イスラム教徒の犠牲者として、客体化され、一般化され、普遍化されてきたと。Mohanty は、Boserup [1970] や Huston [1979] らの研究に対し、「開発」を「経済的發展」、「経済的進歩」と同義に仮定することで、開発がかってないほどの平等化要素とされてきた、という。

上記以外にも、GAD 研究に対しては、北と南の女性を分断してきた点や、結局のところ Women's Studies の枠組みを乗り越えていない、つまり、男性不在であるという指摘もある [Cornwall 2000]。さらに、Cornwall は、男性に問題があるという men's problem discourse も指摘している [ibid.]。

報告者は、GAD 研究の課題として、以上の指摘に加え、セクシュアリティの問題を十分に取扱いしていない点、変化する個人 [藤掛 2003] を十分に捉え切れていない点、ジェンダーという用語が流用されたり（政策に関わるアクターたちが、GAD や女性のエンパワーメントという用語を予算獲得のために流用したり、一方、政策策定のために戦略的に、多様な問題を抽象化してきた点）、フィルター化されてきた点を指摘したい。

GAD は領域横断的 (inter-disciplinary) であり、研究・実践領域でもある。フェミニストの取る立場もジェンダー論者の取る立場もそれぞれ異なる部分がある。また、GAD に関わる実践家、研究者、行政官、草の根の活動家、草の根の人々の考え方や向かう方向も多様である。各人が異なる角度から社会の事象をみつめ、問題を同定し、その解決のための実践をしているのが現状である。

今日、新由主義的な価値観の浸透により格差社会が到来している。また、農業分野においては、FTA、WTO 流の貿易政策などにより農民が二層に分断されつつある。人の移動は加速しており、私たちは新たなジェンダー問題に對峙しつつある。

複雑化する社会の中で今後 GAD が担う役割は

何であろう。多様性を捨象することなく、ジェンダー問題を解決するためには、支配的「西洋」フェミニズムを批判的に再検討しつつ、まず、草の根の人々の声を聞くことではなかろうか。そして、人々の声を政策に反映する新たな枠組みの構築ではなかろうかと考える。

GAD が、草の根の多様性を捨象することなく、ジェンダー問題を解決することは果たして可能であろうか。その問いに答えるための一つの視点として、私たちの中にある複数の自己を再検討する必要があるように思う。

わたしたちの中には、女/男、農民男性/農民女性、役人/商人、妻/夫、など複数の主体がある (藤掛 2004)。個人の中にある複数の主体は、状況に応じ、一つ、またはいくつかが前景化したり、後景化したりする。それらは意識的に行われる場合もあれば、半意識的な場合もあるだろう。また、無意識のうちに行われることもあるだろう。このような複数の主体や、対象地域のリアリティの全てを開発プロジェクトの枠組みに反映させることは時間や予算などの制約から困難である。しかし、いくつかの主体に焦点を当て国際協力事業を実施したり、評価を行うことは可能であろう (藤掛 2005) [Fujikake 2007]。

3. なぜ「ローカル・ニーズ」・「草の根」が重要か？

江藤 双恵

本ワークショップにおける報告者のほとんどは、主として「開発と女性/ジェンダー (WID / GAD)」の領域で、自らのフィールドにおける「ローカル・ニーズ」を汲み取ろうと努力してきた人である。声をあげにくい、あるいは声をあげても政策決定者/実施者まで届きにくい「草の根」の人々とその地域の言葉を使って顔見知りのつきあいをしていながら、「政策」との間を結ぶかけはしになるような存在であろうとしてきた。私たちは、「ローカル」な価値観と西洋的な概念としての「開発」や「ジェンダー」の間には往々にして「ズレ」があり、ドナーの「開発とジェンダー」課題設定のあり方に問題があることに気づいてきたが、特定の対象グループを定め、「さしあたって取り掛かるべき」施策の立案や実施を優先してきた傾向

がある。本ワークショップでは、この「ズレ」の問題から逃げずに正面から立ち向かうことを課題とし、「ローカル」なジェンダー課題を国際協力における個々のプログラムに反映させる過程と手法の検討と提言を行うことを目標とした。

「ローカル」「草の根」の定義

「ローカル」とはいわゆる「現場」のことである。そこには固有の名を持つ土地があり、固有の名を持つ人々が固有の言葉を使って生活している。「草の根」とは、特権や地位を有さない人々のことである。一般に、発展途上国では、政策決定を行う人々と「草の根」の間は断絶されており、特権や地位を有する人々は「草の根」の実情について十分な知識を持っていないだけでなく、往々にして偏見を有している。

なぜ、「ローカル・ニーズ」と「ジェンダー課題」をクロスさせるのか？

「ジェンダー課題」は、「ジェンダー平等」と呼ばれるゴールがあることを前提として「発見」されてきた。しかし、「ジェンダー平等」についてはさまざまな意見があり、もはや普遍的な合意を見つけるのは困難な状況にあることが近年のフェミニスト／ジェンダー研究によって示されてきている。ゴールが相対化されたとき、課題をどうやって見つけるのか？西洋フェミニズムの相対化に関するジェンダー研究の成果は、開発援助の「現場」で働く人間たちを混乱させはしないのだろうか？そこで、本報告では「ローカル」な「草の根」の文脈に即した「ジェンダー課題」というものを、これまでの「開発と女性／ジェンダー（WID／GAD）実践の経験の中から探ることを、「普遍的ジェンダー平等」のオルタナティブとして提案したい。

GADの目標は「ジェンダー平等」を地球上のすべての地域に達成することか？

GADの目標は世界中で通用する「ジェンダー平等」の規格を作ることではなく、さまざまな立場や状況に直面する「草の根」の「幸福」を支援する活動にジェンダーの視点を導入することであると確認したい。

政策科学と文学批評の融合？

「開発と女性／ジェンダー（WID／GAD）」は、

政策科学である。となると、ここで必要なのは「普遍的ジェンダー平等」に代わる選択肢を模索する営みとしての文学批評的アプローチ¹⁾と政策科学との融合ということになる。両者が根本的に相容れない方法論を擁していることは、われわれの課題を複雑にするもっとも主要な要因である。しかし、私たちはこの問題を「不可能」で片付けることなく、取り組むことに挑戦したいと思う。

4. 作られる「ローカル・ニーズ」とジェンダー

日下部 京子

地元のニーズ — 「ローカル・ニーズ」に対応した開発の大切さは、現在では異議を唱える人はいないだろう。援助要請では、開発プロジェクトがローカル・ニーズに対応しているかが、そのプロジェクト実施事前評価の判断基準として重視される。JICAはそのウェブサイト²⁾で、「援助を効果的かつ効率的に実施するためには、開発途上国のニーズに応じた事業を実施することが必要」と冒頭で述べている。しかし、「ローカル・ニーズ」とは何であろうか。多様な「ニーズ」が錯綜する中で、「ローカル・ニーズ」と呼べるものがあるのだろうか。われわれが言説として使う「ローカル・ニーズ」は実際何をさしているのだろうか。

まず、「ニーズ」とは何か。「ニーズ」の特定、特に優先されるニーズの特定は常に政治的な作業によってなされること、外部に向かって発信される「村のニーズ」には地域内での決定の主導権を握ることが少ない貧しい女性の「ニーズ」が反映されにくいことは、周知のとおりである。「ニーズ」は、村はもとより、家族でも個人の中でも複雑に錯綜する概念であるといえる。その意味で、ジェンダー分析の際、実際の／戦略的ジェンダー・ニーズについて語ることは、「ニーズ」を既存のものとして扱うことで、分析の概念としては有用でも、それがすべての女性の「ニーズ」を正しく反映しているかは問題視する必要がある。「ニーズ」の特定は、その地域（Local）の力関係、誰の意見がもっとも大きく反映されるかによって大きく左右される。また、それぞれの構成員が社会的に求められている役割によって、それぞれの構成員が口に出せる「ニーズ」も異なってくる。したが

って、「ニーズ」と言った場合、誰のニーズについて言及しているのか、どのような過程で特定されたのか、などを検証する必要がある。特に、「ニーズ」の達成度がプロジェクトの評価基準となる場合は、何をもって「ニーズ」とするかの判断は重要になる。Mosse [2005] は、著書『耕作される開発 (Cultivating development)』でニーズまたは認識される利害は、常に作り変えられ、開発プロジェクトの成功は「ニーズ」が特定の政策に沿うようにどれほど解釈し直されることができたかどうかで判断されると指摘している。

また、何をもってして、「ローカル」というかも疑問視しなくてはならない。「ローカル」とひとくくりに呼んでしまうことで、「場」がもつローカル (Locale)：関係性が結ばれる場 (Settings of interaction) [Giddens 1984] としての性格が無視またはあいまいにされ、「ローカル・ニーズ」という概念が非政治的な、中立を装い、内部における権力関係を覆い隠す蓑として使われる可能性が大である。「ローカル・ニーズ」を一枚岩とみえることは、ロング (2001) がいうところの「多重的な現実 (Multiple realities)」が抜け落ちてしまうことを意味する。したがって、「ローカル・ニーズ」といった場合に何をさしているのか、どのような分析のもとに特定しているのかを明確にする必要がある。

一般に「ローカル・ニーズ」と呼ばれているものには、最低でも4つあるといえる (図1参照)。(1) 村の男女がそれぞれに、感じているニーズ。これには、ジェンダーによる差、階級・エスニシティ・年齢などによる差が含まれる。(2) 政府やNGOなど開発関係者が認識するニーズ。これは、必ずしも村の人々がそれぞれに感じているニーズとは一致せず、外部者によって行われたジェンダー分析などにより、確認されるニーズも含まれる。これは、また、それぞれの政府やNGOの思惑 (重視する分野など) と例えば、保健NGOは保健のニーズを中心に「発掘」する) により異なるだろう。(3) ドナーが確認するニーズ。ドナーにサポートされやすいニーズがあり、それが強調され、ドナーに伝えられ、ドナーに「公式なニーズ」として採用され、予算がつけられる。(4) これとは、

別に、または、一致することもあるが、村の人々自身にも認識されないニーズがある。ブルドューがいうところのDoxaの領域に入る、問題としてさえ意識されない問題 (ニーズ) である。これは、時に開発関係者や学者から指摘されるかもしれない「ニーズ」だが、さまざまな理由で土地の人々は「問題」として認識したくない、できない、興味をしめさない、課題である。この4つは、重なることもあるし異なることもある。それぞれのカテゴリー内でもニーズは多様であり、一枚岩ではない³⁾。

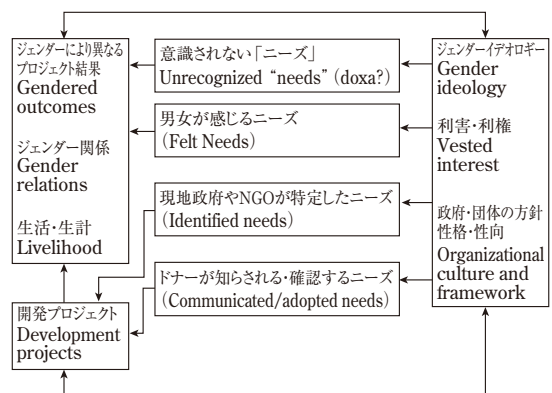


図1 ローカルニーズ概念図

これらの「ニーズ」は、ジェンダー・イデオロギ、それぞれのアクターの利害関係、団体の性格・志向などにより、それぞれ違うものになるだろう⁴⁾。問題は、政府・NGO・ドナーによって確認されたニーズのみが、プロジェクト形成に採用され、村の人々の生活や考え方にまでも影響を及ぼすことである。また、そのようにして形成されたプロジェクトも、土地の人たち (村人のみならず、地元の役人やNGOのフィールド・ワーカー) がそれぞれに優先している課題や「ニーズ」、Doxaにより受け止められ方や実施の仕方がかわり、ドナーや開発関係者が考えていたものとは異なる結果となる可能性もある。このような異なる結果は予期しなかった恩恵または障害として記録されるにとどまり、異なるニーズ、またはニーズの形成についての議論はなされることはあまりない。プロジェクト形成・評価の際には、ローカ

ル・ニーズの形成・認識についての理解を深め、それに影響を与えているジェンダー・イデオロギー、利害や利権関係、政府・団体の方針・政策・性格・志向について分析し、明らかにすることが大切であるといえる。

5. 国際ワークショップに女性市民リーダーを招聘して ～協働の研究活動を振り返る～

水野 桂子

はじめに

本報告は、国際ワークショップに招聘した女性市民リーダー Tさんと筆者の協働による報告について、両者の共通点、相違点をもとに振り返り、その過程で生じた葛藤、ディレンマ、成果を考察するものである。

Tさんの活動

静岡県 B市在住の Tさんは、1940年代前半の生まれであり、1980年代から地域で児童問題、地域福祉、都市計画、社会教育、男女共同参画等多岐にわたる活動を行ってきた市民活動家である。最初の活動は、PTA活動をもとに地域コミュニティで始めた子ども向け文庫活動であった。20数年にわたる諸活動は、本人の自主性に基づいて行われてきたが、結果的にその時々地域における児童相談、高齢者福祉、子育て支援、まちづくりなど課題のニーズに対応したものとなっている。これまでの活動を通じて発揮されたリーダー力や調整力が地域住民、仲間、行政から支持と評価を得たことにより、現在、Tさんは市民活動グループの代表であり、さらに市民と行政の協働においても社会教育委員会等で委員長であり、民と官の両方に関わる地域のリーダーとなった。Tさんと筆者は、1996年に市主催の男女共同参画セミナーに参加して出会って以来、B市での市民活動を通じて交流を続けている。

ワークショップでの報告の概要

Tさんの概要は、生い立ちから始まりこれまでの活動を振り返るものであり、記述の手法は地域女性史の聞き書きを応用したものであった。一方、筆者は、Tさんのライフストーリー研究と彼女の活動の事例分析を行い、中高年期女性が地域で市民活動を通じてエンパワーメントをするというこ

とはどういうことあるのかを、国際的な女性運動、ソーシャルワーク、社会教育、開発援助で提起されてきたエンパワーメント概念をもとに社会学的観点から考察した。

両者の立場性——共通点と相違点

Tさんと筆者の共通点は、第一にB市において男女共同参画審議会委員、市民の学習/活動グループの連合体の会員として、共に「男女共同参画」の活動に関わっていることである。第二には、「女性固有の経験や事象を明らかにし、その問題解決のために社会変革をうながす調査」であるフェミニストアクション・リサーチを市民活動、学術研究それぞれの立場で試みてきた点である。Tさんは、長年の学習活動を通じて、特に福祉と男女共同参画の分野において相談業務、調査手法を習得し、その地域の現状に対応した「市民的専門性」の知見を持っている。実際に、Tさんを中心とした市民による調査の事例の一つは地域の町内会長を対象にした「地域防災と男女共同参画」の意識調査であり、その結果を行政へ提言している。

相違点は、研究と報告は協働作業であったが、筆者が研究者としてTさんの事例分析を行ったことにより、両者は調査対象者（調査協力者）対調査者という非対称な関係になったことである。さらに、作業の途中におけるTさんの語り「あなたのためになるなら、協力するよ」に示されるように、Tさんは市民活動を通じて築いた相互の信頼関係の上で「協力者」になり、「研究対象者」という「支援者」として研究者の養成をすることに貢献したことになる。これは、両者の非対称な関係が微妙に振動する協働作業の過程でもあった。

課題と成果

—葛藤、ディレンマ、つながりの深まりと広がり—

今回のワークショップでは報告者として両者とも「主体」であったが、先に挙げた非対称な関係の揺れ動きによりワークショップの当日が近づくにつれて、Tさんを研究対象として分析することについて、筆者の葛藤は徐々に深まっていった。信頼関係の構築において、その資源となったこれまでに築いた関係性とネットワークはどうなるのか。それがこのワークショップにより崩壊するのではないかという不安と、この研究成果を共有し

地域の活動に活用することでまた関係が深まるであろうという希望が交錯した。

さらに、Tさんへの聞き取りはライフストーリー調査になり、Tさんの同意を得て文章化にしたが、匿名にしても公表した場合は人物が特定されることもあり得る。そして、Tさん自身が活動報告として別の論文を作成しているが、筆者によるTさんの長年にわたる市民活動の経験の論文化のAuthorship（著作権）は誰にあるのか。このような危惧と疑問は、ライフストーリー研究や実証研究において生ずる倫理的ディレンマからきている。研究対象者と研究者の関係性は、永遠の課題ともいわれている。

以上のように、Tさんとの関係性と作品化の過程において、筆者には葛藤とディレンマが常に存在し続けたが、Tさんも同様に彼女自身の葛藤とディレンマがあったに違いない。相互の文章を検討しあった際、Tさんは「こういう見方もあるのね。ちょっと違う捉え方もあるのね。」と語りつつも、その違和感のある箇所について具体的にこれまで一切語っていない。葛藤を抱えながらも、筆者への配慮で語らないのであろう。

しかし、ワークショップから数ヶ月を経て、葛藤とディレンマは消し去ることはできない苦痛を伴う記憶となったが、それらが生じた過程はもう一つの別なものに変容して見えてきた。なぜなら、相互にそれぞれの立場でこのワークショップを振り返る時間を持てたことにある。Tさんへの聞き取り、すなわちライフストーリーのインタビューは、語り手（Tさん）と調査者である筆者との相互行為であり、インタビュー・その論文化（作品化）・口頭報告という一連の過程は社会的相互作用の過程であった。立場性の相違はあったが、ワークショップ報告までの全過程が経験の新たな共有となり、振り返りの時間を経て、相互のつながりと理解がさらに深まったのである。

Tさんがワークショップにおいて『私の活動一人と人とのつながり』というテーマを掲げたように、その言葉どおり、今回の活動を通じてつながりの広まりがその後に生まれている。振り返りの時期を経て、TさんはB市民が実施した「防災と男女共同参画」の調査と、ワークショップでの

バングラデシュの防災の報告とを結びつけ、その研究者を助言者として招聘し、その調査をもとに市民を対象にセミナーを開催した。このつながりが広まることを可能にし、人と人がつながる構造や機能とは一体どんなものであろうか。その一つの要素は、類似の関心や課題を持った人々がその関心等をめぐる活動を共有した過程で生まれる「信頼」ではないかと考える。個別のローカルがつながるために要素となる「信頼」の構造を探っていくことが今後の課題となった。

6. 調査者／研究者のジレンマ

平野 恵子

はじめに

本報告の目的は、2007年3月24日・25日におこなわれた、国際ジェンダー学会主催のワークショップの報告準備過程において、筆者の調査対象者であり共同報告者であるL氏の「物語」の変化をいかに捉えるか、古くて新しい課題、調査者／研究者のポジショナリティとその権力性という側面から考察することにある。

L氏との出会いと関係性

L氏と筆者は2003年から交流を続けている。L氏の娘が筆者の旧知の知人⁵⁾であり、恩師の教え子でもあったという偶然が重なった。そのうち彼女自身も、筆者が調査対象としているインドネシア家族福祉「運動」⁶⁾の地域ボランティアであることが判明し、インフォーマントとなった。L氏はインドネシアの9割近くを占めるムスリムで1950年代前半の生、これまで一度も現金収入を得るような職に就いたことはないが、居住するコミュニティでは、結婚後の1971年よりインドネシア家族福祉「運動」南ジャカルタ市P地区のリーダーとして長くその職を務めており、地域リーダー的存在である。

家族構成は、L氏、夫、子ども4人の8人家族で、夫と共に、イスラームの聖地であるメッカへの巡礼を経験しているため海外渡航はすでに経験済みであったが、単独での海外渡航は本ワークショップが初となった。

筆者がL氏に共同報告を打診したのは、大きく分けて、次の2つの理由があった。第一に、「『草

の根』からジェンダー課題を考える」という本ワークショップのテーマに、住民組織の末端で活動するL氏の参加は意義があると思われたこと。第二に、調査対象者との共同報告という形態は、表象の権力を調査者「わたし」が占有している状況からの脱却を試みるという意図があった。例えばCliffordが述べたように、エスノグラフィーのテキストはもともとエスノグラファーとインフォーマントとの共同作業であるのにも関わらず、権威を帯びた単一の「著者 (ethnographic author)」が占拠する独断的なテキストとして生産されてきた歴史がある [Clifford 1988]。フィールドでL氏に「娘」として世話になり情報を占有するだけのこれまでの関係性に挑戦できるのではないか、これが共同報告を依頼した理由であった。

物語の変化

最後に筆者がジャカルタに赴いたのが2006年11月で、打合わせの結果、L氏が活動をおこなう上での困難に直面する過程を自ら報告することで、フロアの同時代を生きる女性たちと共有可能な課題の提出となるよう、互いの報告内容を組み立てた。筆者からは、特に「夫からの協力が得られなくて非常に苦労した」「本当は働きたかったが、カドゥルとして活動することで（家族以外の）社会とのつながりを持つことができた」（括弧内筆者）という調査時の発言を盛り込んでくれるように依頼し承諾を得た。

ところが帰国後、会場の規模や日程等を記したメールの返信として1月に送られてきた原稿には、「夫は非常に協力的であり、活動上の『困難』について夫といつも話しあっていた」との記載があった。この原稿に対し「11月の話し合いの時点と内容が若干異なるように思うが」と筆者が投げかけると、「特にそのようなことはない」との返信であったため、「困難」に直面した過程に焦点を当ててもらおうよう再度依頼をした。

報告前日の23日にはスピーカー初顔合わせとなる会議がおこなわれたが、その席で初めて対面する他の海外からの報告者の属性（大学講師やNGO代表など）が気になったのか、「私は専業主婦だけど」という言葉がL氏より重ねて聞かれるようになる。同日夕刻には筆者の部屋を訪れ、

報告原稿を変えたいとの申し出があった。変更箇所の要点は、第一に、カドゥルの活動をして良かった、そして家族の協力が欠かせなかった、の二点、結果としてカドゥルが従事する活動は「良い」という「物語」に転態したことで、L氏の物語の変化にあわせて筆者の報告そのものも当初企図していたものから大幅に修正を迫られる形となった。

調査者／研究者のジレンマ

以上のような、L氏の物語の変化は何を意味するのであろうか。調査時のナラティブの変化ならびに調査者と被調査者の権力関係という命題は、既述のように常に議論の俎上にのぼってきた課題であるが、今回の物語の変化を受けて、L氏と筆者双方が置かれている〈場〉の権力関係の再考を迫られることになった。

Wolf [1996] が示唆したように、調査における「調査者／被調査者」をめぐる様々な権力関係のうち特に他者の表象について、フェミニスト調査者は、硬直した南北の権力関係を打破するべく試みてきた。具体的には、ライフ・ヒストリーやオーラル・ヒストリーを採用することで、可能な限り調査者が編集せず、調査者の誘導に従わない、対象者自身の声で語る「物語」を生成することに努めてきたといえよう。Wolfはさらなる挑戦を示すものの、筆者はこうした政治性を念頭に置きつつ、硬直した関係性からの脱却の第一段階として本共同報告において同等のものを目指したつもりだった。

この古くて新しい課題の本ワークショップでの意義を考えてみると、しかしながら、共同報告という形態自体も、誰のための共同報告かという課題から抜け出せていなかったことは明らかであろう。筆者自身が報告内容を設定しており、それは即ち「わたし」のための物語を意味していた。ただしその物語は成功することなく終わったことが本ワークショップで権力関係を再考する意義であるのではないか。L氏の意図した物語に筆者は追従し、一時的にその関係性は転覆されて新たな物語が生成された。さらに、L氏はこの報告を自身の業績としてコミュニティでの会合で報告し、活動の場を州レベルへと伸張しており、自身の日常

的实践レベルでの緩やかな地位の上昇を伴っている。

とはいえ、調査者／被調査者との間の構造的な差異と非対称な権力関係を恒常的に覆すことは非常に困難である。調査者・研究者である「わたし」は従来通りフィールドで得た情報を消費し続けるだろう。だが一方で本事例のような調査者／被調査者の多層的な権力関係が起こりうるものであり、それを見据えた上での差異や権力への理論的再訪がのぞまれる。誰の声を聞き、誰が／を表象し、誰とネットワークを結ぶのか。調査者の権力とポジショナリティという古くて新しい課題への不断な問いこそ、本ワークショップがめざした「草の根」との共同／協働を生み出す理論的実践的土台となるだろう。

7. 成果、課題と今後の展望

池田 恵子

ローカルなジェンダー課題を開発の現場における各プログラムに反映されるようになるためには、ローカルなニーズを知ることから始めなければならない。当プロジェクトでは、ローカル・ニーズを知る手掛かりを、自らが関わっている現場とした。それは日本も対象に含めた広義の開発とジェンダーの実践の場、市民活動の場、または研究の場である。ローカルな場で、ニーズが感じられるか、表明されるかは、内部の人間関係や権力関係によって決まるだけではなく、他でもない私たち、外部出自の関与者との関係性によるところが大きいからである。

そのため、実践家または研究者である当プロジェクトの参加者は、自らの立場性を普段以上に意識しながら調査・執筆活動を行うこととなった。このワークショップで、我々は、ローカルな人間関係・権力関係の中で生きる人々からニーズが表明されることを再確認する経験を得た。そして、関係性が変わると、感じられるニーズ、表明されるニーズも変化する。自らの持つ「中枢性」や「権力性」が明らかになってくるに従って、招聘した地域の女性リーダーの発言内容が変わったという平野の報告は、このことを如実に示している。水野は、招聘した女性市民リーダーとの立場性の相

違などによる葛藤を経つつも、ワークショップ報告までの全過程の相互作用を通して、新たな経験が共有され、相互のつながりと理解がさらに深まったと述べている。

国際ワークショップの開催を通して見えてきたローカル・ニーズを知るための足がかりが2つある。

第一に、「中間の存在」に注目することである。ワークショップに関わった人々の多くは、「中間の存在」であった。すなわち、グローバルな政策、国（地域）内の政策、そしてローカルな住民の間の橋渡し役として活躍する地域 NGO の職員、行政と市民の橋渡し役である女性リーダーなど、政策や行政側のメッセージとローカルな声の両方を聞く立場にあり、ローカルな声をまとめる存在である。女性の中の異なるグループ間の橋渡し役となる立場の人もあろう。彼女／彼らの「中間の存在」としての経験を明らかにすることで、ローカル・ニーズにアプローチできるのではないだろうか。女性の多様性—今回のワークショップでは女性運動さえも取り上げなかった女性の存在が紹介された—、女性の多面性—母であり妻であり娘であり稼ぎ手である女性がニーズを感じる複数の局面があるということ—、女性の代表性—異なる女性集団同士の関係性をどう結ぶか、表明されないニーズをいかに知るかということを含めて—、が重要となるだろう。

第二は、グローバルな政策がローカルな現場に浸透していく過程である。ローカル・ニーズとグローバルな政策の間にあるズレがあるとすれば、ズレたように見える政策が提唱され、実践されるに至ったプロセスを解明する必要がある。すなわち、政治的背景や権力構造をもっとよく見ることが今後の課題であろう。同時に、グローバルな政策・プロセスに適応できる可能性が人によって異なることに着目し、その格差を把握することも重要である。

そのためには「成功譚」の裏にある「物語」をすくいあげてローカルの実情に近づく工夫が必要になる。もちろん、ローカル vs グローバルという二者択一の図式にとらわれないで考えてみる必要がある。

我々がこれまで積み重ねてきた研究活動の成果の一つとし、そして今後の活動のさらなる発展に向けたネットワーキング構築をめざして、国際ワークショップを開催した。そこに至るまでのプロセスを含め、本ワークショップにおいて得られた知見や課題は大変貴重であり、多くの方々と共有を望みたい。また、現時点でのネットワークを維持強化し、より拡大していくための手法の検討も始めている。各メンバーのレベルにおいても分科会としても課題に関する調査と考察を継続し、意義ある第二回国際ワークショップ開催に繋げることも目標に掲げたところである。

謝 辞

これまでの長い間にわたる定例の研究会において、さらには本ワークショップに際して、貴重なご指導をくださり続けた村松安子先生、原ひろ子先生には心より感謝を申し上げたい。また、本ワークショップ開催を全面的にバックアップしてくださった大山七穂会長をはじめとする国際ジェンダー学会および我々の研究とネットワーク構築活動をご理解くださり、多大なご支援を下されたトヨタ財団、国際交流基金、IGSW 基金には厚く御礼申し上げます。

文 献

- バトラー ジュディス 1999『ジェンダー・トラブル フェミニズムとアイデンティティの攪乱』（竹村和子訳）青土社
- Clifford, J. 1988 *The Predicament of Culture: Twentieth-Century Ethnography, Literature, and Art.*, Cambridge: Harvard University Press.
- Cornwall, A. 2000 “Missing Men? Reflections on Men, Masculinities and Gender in GAD, Masculinities and Gender in GAD”, *IDS Bulletin*, 31 (2): 18-27.
- 藤掛洋子 2005「農村女性のエンパワーメントとエンパワーメント評価—南米パラグアイにおける生活改善プロジェクトの事例から考える—」『ワールド・トレンド』2005年9月号：30-33 アジア経済研究所
- 藤掛洋子 2008「質的評価」三好皓一編『評価論を学ぶ人のために』36-57 世界思想社
- Fujikake, Y. 2007 “Toward Post Gender and Development (GAD)” *Gender and Development' and the Local Needs: Networking for Gender Equity with Locally-Diverse Gender Needs*, (Gender and Development' and the Local Needs: Networking for Gender Equity with Locally-Diverse Gender Needs): 18-19 The International Society for Gender Studies
- Giddens, A. 1984 *The constitution of society: Outline of the theory of structuration*, University of California Press Berkeley.
- Mohanty, C. T. 1997 “Under Western Eyes: Feminist Scholarship and Colonial Discourses,” in Anne McClintock et al., *Dangerous Liaisons: Gender, Nation, and Postcolonial Perspectives*, Minneapolis: University of Minnesota Press: 255-277
- Mosse, D. 2005 *Cultivating development: An ethnography of aid policy and practice*, London and Ann Arbor: Pluto Press.
- 中谷文美 2001「＜文化＞？＜女＞？民族誌をめぐる本質主義と構築主義」, 上野千鶴子編, 『構築主義とは何か』勤草書房：109-137.
- 岡真理 2000『彼女の『正しい名前』とは何か 第三世界フェミニズムの思想』青土社
- Reinharz, S. 1992 *Feminist Methods in Social Research*. Oxford.
- 桜井厚 2007「ライフストーリー研究における倫理的ディレンマ」『先端社会研究～Kwansei Gakuin University 21st Century COE Program～（第6号）；特集調査倫理』関西学院大学出版会：87-111.
- 上野千鶴子・寺町みどり編著 2004『市民派政治を実現するための本—わたしのことはわたしが決める』コモンズ
- 宇田川妙子・中谷文美編, 『ジェンダー人類学を読む—地域別・テーマ別基本文献レビュー—』, 世界思想社
- 内山田康 2000「ジェンダーを囲い込む, ジェンダーを解放する, ジェンダーの奥を見る」『中央評論』231号
- Wolf, D. ed. 1996 *Feminist Dilemmas in Fieldwork*. Boulder Colo: Westview Press .

-
- 1) ここで想定しているのは、性差そのものを脱構築しようとするクィア理論の試み（バトラー 1999）、西洋フェミニズムの普遍性に意義を唱える「第三世界フェミニズム」論（岡真理 2000）などである。また、内山田（2000）の議論からも示唆を得ている。
 - 2) <http://www.jica.go.jp/infosite/evaluation/index.html2007/01/01>
 - 3) ここでローカルな場である村のニーズという分類を入れていない。これは、一般に村のニーズといわれるのは、この4つが錯綜する中で権限のある人間・組織によって特定されるからである。
 - 4) このほかに、グローバリゼーションやマクロ経済政策、政治的状況などの要因も働くが、ここには含めていない。
 - 5) 筆者のフィールドであるジャカルタ特別州南部に、実家（夫の両親が住む）があり、フィールドワークの折には報告者はそこに寝泊りしている。
 - 6) 家族福祉「運動」は1970年代に政府の開発政策として採用される。予算が少なく、地域の女性ボランティアが実質的に活動を支えているといっよい。先行研究では、開発に女性を無償で動員し、それは夫の社会的な属性に基づいた動員であるといった批判がある。一方、プログラムの内容それ自体は女性のエンパワーメントに資したという評価もみられる。インドネシアの地方行政区分は、日本のそれと酷似しており、行政区分末端の町内会、隣組レベルで、住民である女性自身がボランティア的に活動をおこなう点に特徴がある。このボランティアは、カドゥルと呼ばれ、L氏もその一員である。

（2008.3.28 受付 2008.5.19 受理）